

福祉現場の今を読み解く

第4回 入所施設は必要なのか？

前号にて、入所施設をめぐっては、現在国際的には「脱施設」という政策が展開されていることを紹介しました。しかし、本当に入所施設はなくしても良いものなのでしょうか？ 本稿では、現場の実践に学びながらそのことを考えていくたいと思います。

入所施設の利用者の推移

まずは、現在の入所施設の利用状況について確認したいと思います。18歳以上の障害者が施設と地域のどちらで生活しているかという割合をみると、施設入所者の割合は、年々低くなっています。最も施設入所者の割合が高い知的障害者の場合で見ると、2006年には29・3%

であったのが、10年後にはその半数以下の13・4%まで下がっています。しかしながら、入所施設の利用者がこれ以上減らない背景には、単身やグループホームなどでの地域生活を支える制度が十分でない中で、障害のある人の長命化や重度化が進展し、入所施設に対するニーズが一定割合保持されていることが考えられます。入所施設の中には、累犯障害者や暴力等により地域で暮らすことがむずかしい人への支援、また強度行動障害など特定の障害に特化して支援をおこなう施設もあります。

脱施設化の経緯

脱施設化を求める歴史は国際的には長

論が大きな声になっていました。

大人の親密な関係を築く

入所施設は、本来不要な施設なのか？ そのことを考えたくて、埼玉県のみぬま福祉会の太陽の里を訪ねて、入居者に、利用するようになつた経過や、住み心地についてお尋ねしました。

入所のきっかけとしては、嶋さんは、以前一般就労していたときに独身寮があつたが、トラブルがあり、行くところが見つからず市役所の紹介で来たとのことで、他にも2カ所見に行き、収容所みたいな感じがしたけど、ここが一番感触が良く選択したこと。『今も、勝手にいろいろ言わせてもらって、自然な感じで暮らしている』「規則に縛られないところが良い」とのことです。栗原さんは、自宅で祖母と父と暮らしていましたが、祖母が高齢になり入所しました。部屋からの景色が気に入っている」「帰省はできないけど、家族が会いに来てくれること」のを楽しんでいることです。

みぬま福祉会・太陽の里にて入居者の方へインタビュー

も含めて理解をされることが大事だと言います。太陽の里には、嶋さんを含めて中途障害のメンバーも5名おられ、職員主導で運営がなされようとすると「いつ決まったの？」「誰が決めたの？」という声があがることがとても重要だと思っているとのこと。職員のシフトや現場の課題もできる限り、入居者にも公表するなかで、大変さを職員だけで引き受けない（入居者にも納得してもらう）、誰か一人に集中的なケアが必要なときに、その人だけが優遇されるのではなく、自分もそ

うなったときには大事にしてもらえるといふ思いにつなげる安心感が大事と語ります。

高橋さんは、どんなに障害が重くても、大人に相応しい「親密な関係」があると語ります。自分の生きてきた歴史や、その時々でどういう思いを抱いていたかを他者に知つてもらうという日常的な関係をともにする経験を長い時間かけて重ねていくこと。結婚や恋人などの形だけではなく、互いに想い想われ、かけがえのない存在となつていくことが重要なのではないかと語ります。

入居者の方は、今の生活で改善を要望することとして「職員の仕事がギリギリで走り回っているので、もっと余裕をもつてほしい」「職員がもつといたらビーズをやりたい」「コロナ前には仕事を行っていたので、今も行きたい」「もうちょっとと職員と話がしたい」ということを挙げておられ、入所施設の制度的な条件を整える必要があると思いました。

入所施設が不要かどうかを議論する前に、入所施設であつても大人として当たり前の生活が送れる環境が必要だと思いました。次回は、グループホーム、一人暮らしについて考えていただきたいと思います。



佛教大学
田中智子
たなかともこ／専門
は障害者家族に生じる
生活問題、ケアに関する
理論的考察。著書に
『障害者家族の老いる
権利』(全障研出版部)
など。

